

東京染小紋の染め上がるまで

① 型紙の彫刻

図案を考えたあと型紙に図案を彫ります。良質の手漉き和紙を2～3枚、柿の渋で張り合わせた“地紙”に、錐（錐彫り）、小刀（突き彫り・引き彫り）、柄がつくられている道具（道具彫り）などを使って模様を彫ります。専門の型屋が彫る場合が多く、古くから伊勢の型紙が有名でした。

② 色糊の調整

色糊は、染め上がりの出来栄えを左右する大事なものです。色糊は糯粉と米ヌカを混ぜて蒸し、よく練ってから染料を入れ、試験染めをしながら慎重につくります。

糊には地色（生地ちぢみの地の色）を染める地色糊と目色（型付けで染める生地ちぢみの柄）を染める目色糊とがあります。

③ 型付け

長板に白生地を張り、その上に型紙をのせ、へうで糊（目色糊）を置いていきます。型紙の彫り抜かれた部分だけが染め出され、生地に柄が染められていきます。

④ 地色染め（しごき）

糊が乾いたところで、生地を板からはがし、染料の入っている地色糊を大きなへうで全体に平均に塗り付けて、生地ちぢみの地色を染めます。これを“しごき”といいます。

ここで振りかけられるオガクズは、蒸しの際に、生地ちぢみどうしが張りつかず、全体に平均に染料を定着させるためです。

⑤ 蒸し

地色糊が乾かないうちに蒸箱に入れ、摂氏90～100度で、15～30分位蒸します。糊の中に入っている染料を生地に定着させるため行うもので、蒸し加減は調整します。

⑥ 水洗い

蒸し上がった生地は、糊や余分な染料を落とすため、水洗いをします。昭和38年までは前を流れる神田川で洗っていましたが、現在は地下水をくみ上げ、水を噴射する糊落とし機を使用します。

⑦ 乾燥

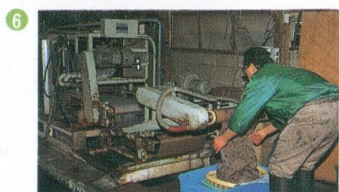
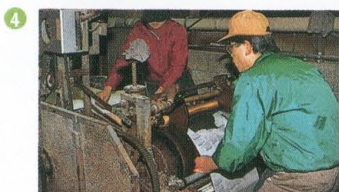
水洗いされた生地を、張って乾燥させ、湯のしで幅を整えます。



地色糊



目色糊



洗い(糊落とし機)